

# 例外型コンパクト Lie 群 $G_2$ の極大対蹠部分群

田中 真紀子 (東京理科大学理工学部)\*<sup>1</sup>

田崎 博之 (筑波大学数理物質系)\*<sup>2</sup>

保倉 理美 (福井大学学術研究院工学系部門)\*<sup>3</sup>

コンパクト Riemann 対称空間  $M$  を一つ固定してその部分集合  $B$  を考える。任意の元  $x, y \in B$  について  $s_x(y) = y$  となる時、 $B$  を  $M$  の対蹠集合という。ここで、 $s_x$  は、 $x$  における  $M$  の点対称を表す。さらに、 $M$  の対蹠集合の内、包含関係で極大なものを  $M$  の極大対蹠集合と呼ぶ。また、 $M$  がコンパクト Lie 群上に両側不変計量を導入したものの時、 $M$  の単位元  $e$  を含む  $M$  の極大対蹠集合を、 $M$  の極大対蹠部分群と呼ぶ。これは、 $M$  の位数 2 以下の元からなる可換部分群の内、極大であるものと同じである。

本講演では、Chen-Nagano [1] が導入したコンパクト Riemann 対称空間における polars の概念を用い、連結な例外型コンパクト Lie 群  $G_2$  の極大対蹠部分群は、共役を除いて唯一つであることを示す。ここで、 $G_2$  は定数倍を除いて定まる両側不変 Riemann 計量によって、連結なコンパクト Riemann 対称空間と考えている。 $G_2$  型拡大 Dynkin 図形についての考察より、 $G_2$  の普遍被覆群の中心は単位元のみ [2] であるから、 $G_2$  は単連結である。

$G_2$  の単位元  $e$  における点対称の不動点集合  $F(s_e, G_2)$  の  $\{e\}$  以外の連結成分は唯一つであり、それを  $M_1^+$  とおくと、

$$F(s_e, G_2) = \{e\} \cup M_1^+, \quad M_1^+ \cong G_2/SO(4)$$

と書ける。また、任意の点  $o \in M_1^+$  に対して、 $o$  における  $M_1^+$  の点対称の不動点集合  $F(s_o, M_1^+)$  の  $\{o\}$  以外の連結成分も唯一つであり、それを  $M_{1,1}^+$  とおくと、

$$F(s_o, M_1^+) = \{o\} \cup M_{1,1}^+, \quad M_{1,1}^+ \cong (S^2 \times S^2)/Z_2$$

が成り立つ。さらに、 $(S^2 \times S^2)/Z_2$  の極大対蹠集合は、 $\{[e_1, \pm f_1], [e_2, \pm f_2], [e_3, \pm f_3]\}$  に合同である。ここで、 $e_1, e_2, e_3 \in S^2$  は第一因子の  $S^2$  の互いに直交する元であり、 $f_1, f_2, f_3 \in S^2$  は第二因子の  $S^2$  の互いに直交する元である。以上より、次の定理を得る。

**定理 1** ([6])  $M_1^+$  の極大対蹠集合は  $\{o, [e_1, \pm f_1], [e_2, \pm f_2], [e_3, \pm f_3]\}$  に合同になる。さらに  $G_2$  の極大対蹠部分群は

$$\{e, o, [e_1, \pm f_1], [e_2, \pm f_2], [e_3, \pm f_3]\}$$

に共役になる。

次に、 $G_2$  の八元数  $O$  の自己同型群としての実現 [3, 5] と、古典群  $SO(4)$  の  $G_2$  の部分群としての実現 [4] を用いることで、 $G_2$  の極大対蹠部分群を具体的に表示する。

\*<sup>1</sup> e-mail: tanaka\_makiko@ma.noda.tus.ac.jp

\*<sup>2</sup> e-mail: tasaki@math.tsukuba.ac.jp

\*<sup>3</sup> e-mail: yasukura@u-fukui.ac.jp

Hamilton 3対  $i, j, k$  によって、四元数  $R$ 代数を

$$\mathbf{H} := \{b = \sum_{h=1,i,j,k} b_h \mathbf{h} \mid b_h \in \mathbf{R}\}$$

と表し、任意の  $b = \sum_{h=1,i,j,k} b_h \mathbf{h} \in \mathbf{H}$  に対し、 $\bar{b} := b_1 - \sum_{h=i,j,k} b_h \mathbf{h} \in \mathbf{H}$ ,  $|b| := \sqrt{b\bar{b}} \in \mathbf{R}$  とおく。さらに、 $\text{Im}\mathbf{H} := \{b \in \mathbf{H} \mid \bar{b} = -b\}$  とおく。Cayley-Dickson process により  $\mathbf{O} := \mathbf{H}^2 = \mathbf{H} \times \mathbf{H}$  とおき、次式で  $\mathbf{O}$  の任意の2元の積を定める。

$$(m, a)(n, b) = (mn - \bar{b}a, a\bar{n} + bm) \quad ((m, a), (n, b) \in \mathbf{O})$$

このとき、

$$\text{Aut}(\mathbf{O}) := \{\alpha \in GL_{\mathbf{R}}(\mathbf{O}) \mid \alpha(xy) = (\alpha x)(\alpha y); x, y \in \mathbf{O}\}$$

とおくと、 $\text{Aut}(\mathbf{O})$  は連結 [3] であり、Lie 群同型  $\text{Aut}(\mathbf{O}) \cong G_2$  の存在もわかる [5]。

$Sp(1) := \{q \in \mathbf{H} \mid |q| = 1\}$  とおく。写像  $\psi : Sp(1)^2 \rightarrow GL_{\mathbf{R}}(\mathbf{O}); (p, q) \mapsto \psi(p, q)$  を

$$\psi(p, q)(m, a) := (qm\bar{q}, pa\bar{q}) \quad ((m, a) \in \mathbf{O})$$

と定めると、 $\psi$  は  $\text{Aut}(\mathbf{O})$  の中への Lie 群準同型であり、 $\gamma := \psi(1, -1)$  とおくと、

$$\text{Aut}(\mathbf{O}) \supset \{g \in \text{Aut}(\mathbf{O}) \mid g\gamma g^{-1} = \gamma\} = \psi(Sp(1)^2) \cong SO(4)$$

である [4, Theorem 1.3.4]。このとき、 $F(s_e, \text{Aut}(\mathbf{O})) = \{e\} \cup M_1^+$ ;

$$M_1^+ = \{g\gamma g^{-1} \mid g \in \text{Aut}(\mathbf{O})\} \cong \text{Aut}(\mathbf{O})/\psi(Sp(1)^2) \cong G_2/SO(4)$$

であることが確認できる。また、 $o = \gamma \in M_1^+$  について、 $F(s_\gamma, M_1^+) = \{\gamma\} \cup M_{1,1}^+$ ;

$$M_{1,1}^+ = \{\psi(p, q) \in \psi(Sp(1)^2) \mid p^2 = q^2 = -1\} \cong (S^2 \times S^2)/\mathbf{Z}_2;$$

$$S^2 := Sp(1) \cap \text{Im}\mathbf{H} \subset \text{Im}\mathbf{H}, \quad \mathbf{Z}_2 := \{\pm(1, 1)\} \subset \mathbf{O}$$

であることも確認できる。さらに、 $M_{1,1}^+$  の極大対蹠集合は  $\{\psi(i, \pm i), \psi(j, \pm j), \psi(k, \pm k)\}$  に合同になることもわかる。これらより、次の定理を得る。

**定理 2** ([6])  $M_1^+$  の極大対蹠集合は  $\{\psi(1, -1), \psi(i, \pm i), \psi(j, \pm j), \psi(k, \pm k)\}$  に合同になる。さらに  $\text{Aut}(\mathbf{O})$  の極大対蹠部分群は

$$\{\psi(1, \pm 1), \psi(i, \pm i), \psi(j, \pm j), \psi(k, \pm k)\}$$

に共役になる。

## 参考文献

- [1] B.-Y. Chen and T. Nagano, A Riemannian geometric invariant and its applications to a problem of Borel and Serre, *Trans. Amer. Math. Soc.* **308** (1988), 273–297.
- [2] M. Goto and F.D. Grosshans, *Semisimple Lie algebras*, Marcel Dekker Inc., 1978.
- [3] 横田一郎, 群と表現, 裳華房, 1973.
- [4] I. Yokota, Realization of involutive automorphisms  $\sigma$  and  $G^\sigma$  of exceptional linear Lie groups  $G$ , Part I,  $G = G_2, F_4$  and  $E_6$ , *Tsukuba J. Math.* **14**-1(1990), 185–223.
- [5] I. Yokota, Exceptional Lie groups, arXiv:0902.0431v1[math.DG]3 Feb 2009, *e-print*.
- [6] M. S. Tanaka, H. Tasaki and O. Yasukura, Maximal antipodal subgroups of the compact Lie group  $G_2$  of exceptional type, *in preparation*.